

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第987号 平成27年8月25日

センス・オブ・ワンダー（1）

以前、塾頭通信780号で「驚くという事」について書きましたが、本日の「センス・オブ・ワンダー」はその続編のつもりです。

人は成長するに従って驚く事が少なくなって行きます。それは、驚きへの感性が成長と共に鈍く、錆び付いて行くからに他なりません。

「センス・オブ・ワンダー」というのは、レイチェル・カーソンの著書の題名ですが、彼女はその中で、「センス・オブ・ワンダー」を「美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目をみはる感性」と定義づけています。

この「センス」について、国立環境研究所主任研究員の多田満氏は「もって生まれたヒトの本能的な感性（感じる働き）であり、受動的な精神能力（感覚的能力）と呼べるものであると述べています（同氏著「センス・オブ・ワンダーへのまなざし」から）。

カーソン氏は、「センス・オブ・ワンダー」の中で「この感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤になる」と述べていますが、地下鉄の中で大の大人達がスマホのゲームに夢中になっている様子を見ていると、彼女の指摘が反面教師のように浮かび上がって来ます。つまり、つまらない人工的なものに夢中になっていると、「センス」がどんどん劣化していくという事であり、それはまた、驚く事からはどんどん遠くなるという事だと思えます。

ところで、レイチェル・カーソン氏は、農薬による環境の汚染と破壊の実態を告発した「沈黙の春」の著者として世界的にも有名な方です。彼女は、「沈黙の春」を執筆中にガンに侵されますが、闘病を続けながら執筆を続け、1962年にこの本を完成させています。

「沈黙の春」を書き終えたものの、自分に残された時間が短い事を知っていたカーソン氏は、最後の仕事として「センス・オブ・ワンダー」の執筆を始めます。しかし残念ながら、彼女はこの本の完成を見ずに1964年4月、56歳という若さでこの世を去ってしまいます。しかし、友人達はその遺志を継いで彼女の死の翌年に「センス・オブ・ワンダー」という1冊の本にして出版しました。

カーソン氏は、この本の中で「ある秋の夜、私は1歳8ヶ月になったばかりの甥のロジャーを毛布にくるんで、雨の降る暗闇の中を海岸に降りて行きました。海辺には大きな波の音が轟きわたり、白い波頭が叫び声を上げては崩れ、波しぶきを投げつけてきます。私達は、まっ暗な嵐の夜に、広大な海と陸との境界に立ちすくんでいたのです。その時、不思議な事に私達は、心の底から湧き上がる喜びに満たされて、一緒に笑い声を上げていました。」と述べています。

この「心の底から湧き上がる喜び」は、甥のロジャーと共に、カーソン氏自身の中にも、自然が織りなす様々な営みに対して、感動や共感、驚きや恐れ、称賛や愛を感じる心が溢れていたからに他ならないでしょう。

カーソン氏は、人間を超えた存在を認識し、恐れ、驚嘆する感性を育み強めていく事の中に、永続的で意義深い何かがあると信じていたようです。

そして彼女は、「地球の美しさと神秘を感じとれる人は、科学者であろうとなかろうと、人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまされる事は決してない」と述べています。「孤独にさいなまされる」事があるかないかは分かりませんが、少なくとも、心の中に「センス・オブ・ワンダー」を保ち続けている限り、人生に飽き飽きする事はないでしょう。

(塾頭 吉田洋一)